



# 共同通信



2011年4月26日 176(386号)

日本基督教団 西宮公会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22  
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp  
<http://koudou.jp/> 振替01170-3-4901

## To tell the story 76 「はじめまして・お久しぶりです」

はじめまして。そしてお久しぶりです。東京に3年半前に引っ越しした村雨です。

我が家の共同歴と言えば、この春から4年になる栞奈がプレぽっぽから年長の夏休み前まで通っていたという、たった3年弱になります。

こんな私が共同通信に何かを書くなんておこがましいと思ったのですが、順子先生から「その時のことを書いてくれればいいのよ」と言っていたので、今こうしてペンをとっている次第であります。

その日は突然にきました。

3月11日。私と栞奈の三つ下の弟

の岬季は、こちら東京での幼稚園の卒園を間近に控え、謝恩会の準備をその幼稚園に残ってやっていた。教室の中でテーブルを並べたり飾り付けをしたりしていると、急に大きな揺れを感じました。「地震だよ！園庭に出よう！」慌てて教室の外に出て、外で遊んでいた子どもたちと一緒に園舎から離れた大きないちょうの木の下に集まりました。揺れはその一度で収まらず、繰り返し何度も小さくなることなく続きました。あまりに続く揺れの中で本当に不安になってきた時に、共同幼稚園時代の友人からの電話が携帯電話にか

時代にふり回されるのではない  
あの時 心を躍らせて生きた  
後悔に 身をふるわせたこともある  
笑い 泣き 歯ぎしりをした  
今日 こんな決意をしたという

自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい、  
自分の人生を語ってほしい

かってきました。「絵理子大丈夫なん？」その声を聞いた途端、私はほっとして張りつめていたものから解放され涙が流れてきました。私はとにかく気持ちを落ち着けてから、栞奈を学校に引き取りに行きました。学校につくと、不安から、栞奈をはじめとして何人もの女の子たちが目を真っ赤に泣き腫らしていました。

そんな栞奈も、まだ余震は続いていましたが私と岬季と自分のお家に帰り、家族の安否を確認しながら公同の仲間から次々と届いた電話やメールを読んでは、勇気づけられていました。

今回の東北地方太平洋沖地震は、大きかった地震の被害だけでは収まらず、続く余震、スーパーの買い占め、計画停電、原発という様々な大きな問題をも抱えました。

あの3月11日から変わらず不安な日々を過ごしている私たちに荷物を送ってくれた公同の友人もいました。気分転換に、西宮に遊びにおいでと

言ってくれたのも公同の友人でした。そのお陰で春休みに、本当に何も考えずに、子どもたちをのびのびと遊ばせることができました。

また幼稚園にも顔を出すことができ、園長先生、順子先生、栞奈が特別にお世話になった石堂先生や水田先生にも会い、元気な姿を見せることができました。園長先生にはとても心配していただき、西宮に引き留めていただきました。

私たちの公同歴は短いですが、気が付けばすでに公同歴よりも、公同を離れ引っ越しした後の時間の方が長くなっています。でも、こんな私たちをいつまでも温かく受け止めてくれるこの公同のつながり。私たちも胸をはって、公同仲間と言っていいのでしょうか……。

(村雨絵理子)

川村湊『福島原発人災記』は自らを 米英ソ中仏の核実験による放射能雨 世代と規定する文芸評論家による、2011年3月11日から25日までの記録である。私は今まで「原発」ということをほとんど考えてみなかったと告白する著者はしかし今度の事故に接して「こんな震災をもたらした者たちへの「怒り」にふるえ一介の物書きとして私にできることはこの原発震災略の現状を書くことしかないのではなか」と考えるのだ。

( 齊藤美奈子 )

わたしは声を出して主に呼ばわり、声を出して主に願い求めます。わたしはみ前にわが嘆きを注ぎ出し、み前にわが悩みをあらわします。わが霊のわがうちに消えうせようとする時も、あなたはわが道を知られます。彼らはわたしを捕えようとわたしの行く道にわなを隠しました。わたしは右の方に目を注いで見回したが、わたしに心をとめる者はひとりもありません。わたしは避け所がなく、わたしをかえりみる人はありません。主よ、わたしはあなたに呼ばわります。わたしは言います、「あなたはわが避け所、生ける者の地でわたしの受くべき分です。どうか、わが叫びにみこころをとめてください。わたしは、はなはなだしく低くされています。わたしを責める者から助け出してください。彼らはわたしにまさって強いのです。わたしをひとやから出し、み名に感謝させてください。あなたが豊かにわたしをあしらわれるので、正しい人々はわたしのまわり

に集まるでしょう」( 詩篇 142 篇 1 ~ 7 節 )

この歌ないしは祈りを生みだしたものは、たぶん歌い手( 祈り手 )の生きた現実( それを押し出したという意味での )であり、それが歌い手の想像力によって書き残されることになったように思えます。歌い手に「わたしは声を出して、主に呼ばわり...」と“ 呼ばわらしめた ” 現実が何であったのかは解りません。しかし、歌い手は、その現実の前で「... 声を出して呼ばわり、声を出して願い求めます」と、表現者として立ち向かうことを宣言します。その嘆き、その悩みが、どんなに深く、どんなに圧倒するものであったとしても、言葉で表し、注ぎ出す表現者として立ち向かうことは決して止めないと。現実には押し出されると同時に、表現者としての覚悟が、嘆きを嘆きとして、悩みを悩みとしてめぐり、かつ引き受けます。同時に歌い手は、迫っている現実、引き受ける自らを、さらけ出すことを忘

れません。「わたしはみ前に嘆きを注ぎ出し、み前にわが悩みをあらわします」と。そして、わたしがわたしであり得なくなる危機の時、そこで立っているわたしの言葉が「わが霊がわがうちに消えうせようとする時も、あなたはわが道を知られます。彼らはわたしを捕えようと、わたしの行く道にわなを隠しました」です。その時のわたしは「わたしは右の方に目を注いで見回したが、わたしを心にとめるものはひとりもありません。わたしには避け所がなく、わたしをかえりみる人はありません」、即ちわたしを待ちうけているのは孤立です。それが「主よ、わたしはあなたに呼ばわれます。わたしは言います。『あなたはわが避け所、生ける者の地でわたしの受くべき分です』」である時、そこへの逃避でないのはもちろんです。歌い手は「わたしは呼ばわれます」「わたしは言います」と、“わたし”であること、“呼ばわり”“言う”表現者であることを、同時に宣言するのですから。そうして、選んだにせよ選ばれたにせよ、歌い手は孤立しています。孤立者ではあっても孤独ではないのは、歌い手には呼ばれる相手がいて、呼ばれることは止めません。呼ばれることが、そこへの逃避ではないのはもちろんです。歌い手であるということ、表現者であることで、その歌、表現に求められているのが

知っています。「どうか、わが叫びをみこころにとめてください。わたしははなはだしく低くされています。わたしを責める者から助け出して下さい。彼らはわたしにまさって強いのです」。“はなはだしく低くされ”“まさって強い”誰かと立ち向かってなお、歌い続ける表現者であり得るとすれば、それは勇気です。しかし、それが叫びとなり、責められる現実であって、孤立者として生きざるを得ないことを、歌い手は知らない訳ではありません。しかし、それを恐れないとしたら、一方で恐れさせない力に対しても謙虚であるからです。「わたしをひとやから出し、み名に感謝させてください。あなたが豊かにわたしをあしらわれるので、正しい人々はわたしのまわりに集まるでしょう」

(菅澤 邦明)

## ～今月のいのり～

今年は葉桜の鮮やかな時期のイースターです。

去年の4月4日、桜の花を眺めながらのイースターのことを思い出します。一年間、私たちはそれぞれの道を歩んできました。

あなたの御元に旅立たれた方々、新しくこの世に迎えられた子どもたち、出会いと別れも繰り返しました。

神様、あなたは一人子イエスを私たちの世に送られました。

そして全ての人の罪のためにその方を十字架につけ、復活させられました。主イエスが死に打ち勝ち永遠の御国で私たちを迎えて下さるのは、私たちの希望であり、信仰です。

しかし、神様、私たちは一度死んだら生き返ることはできません。

突然に、理不尽に命を奪われても、生き返ることはできません。

あなたは私たちを永遠の別れを経験するように作られました。

神様、どうか私たちに、この世では限りある命がどれだけ愛されているか、どれだけ大切なものであるか、気づかせて下さい。

そして真心を持って、それを隣人に伝えることが出来ますように。

(大平 有紀)

## “春・2011年度が始まりました”

皆さま初めまして、ご縁があり今年から共同幼稚園で働かせて頂く事となりました、桐生育枝と申します。私が西宮共同幼稚園を初めて訪れたのは去年の秋頃でした。その日は風が気持ちよく、園庭では木々の揺れる音、子ども達の楽しそうな声が響き渡っていました。温かみのある木

造園舎、たくさんの文庫、半袖にサンダルの子も達、その雰囲気を感じ「ああ、この場所で子ども達と毎日を過ごしてみたい。」と思いました。その後、順子先生のご好意で幼稚園のお手伝いをさせて頂くようになり気づけば半年。本当に様々な行事に参加させて頂きました。このよう

な素晴らしい機会を与えてくださった先生方、保護者の方々に感謝したいと思います。

春からは先生として子ども達と毎日を過ごして行くのだなあ、と期待と不安で胸いっぱい。そんな春休みに悲しい出来事がありました。東日本大地震です。どれだけの子ども達が新しい春を迎えられなかったのでしょうか。私と同じように社会人の一歩踏み出すはずだった方もいらっしゃると思います。そのような事を考えると悲しみで胸がいっぱいになりました。ですが、今私に出来る事は与えられた命を精一杯生きること。ここ西宮共同幼稚園で子ども達と毎日を過ごし、何事にも誠実に取り組む事。人間として成長できるように一日一日頑張る事だと思います。

2011年度が始まり、私は年長はっぱ組の担任となりました。35人の小さな仲間たち。やんちゃな子、おっとりした子、ちょっとぴり泣き虫な子、と個性豊か。子どもたちの着眼点や世界観にこの一ヶ月毎日驚かされる事ばかりです。それと同時に、とても愛おしく感じます。

年長さんはこの4月、王子動物園や

桜ノ宮の造幣局、須磨水族館、被災地復興のコンサートへ出かけたり、畑や公園、市民グラウンドなどへ散歩に行きました。王子動物園を訪れると桜が満開！アザラシの水槽には花びらが浮かび「おしゃれだね～」と言う声が聞こえてきました。また、アザラシの鳴き声を真似する子ども達も。「おうおうおうー！」とっても可愛いはっぱ組のみんなの声にアザラシもこちらを向いて興味津々でした。

畑では色とりどりのチューリップが花咲かせ、イチゴ、ジャガイモの苗がすくすくと育っています。行く度に化する畑の様子に嬉しく感じます。子ども達にかかれれば雑草も楽しむ道具に！ふと、周りを見渡すとナズナで花束や腕輪を作っていたり、ポピーの花を簪にしてみたり。「先生あげる！」と花や葉っぱをくれるみんなに温かい気持ちになりました。

これからも様々な出会い、出来事を通して季節を感じ豊かな毎日を過ごす事が出来ますように。社会人として新しい一歩。まだまだ人間としてつたないですが一生懸命頑張りたいと思います。

(桐生 育枝)

## “2011年の春、初めまして！”

桜が満開に咲き、春が訪れました。  
6 そして、新たな1年がスタートしま

した。初めまして、2011年度4月から、西宮共同幼稚園で働くことにな

りました、和田ひろ美と申します。これからの毎日、たくさん子どもたちやお家の方々、先生方や地域の人々と交流を深め、自然との出合いを大切にしていきたいと思います。一步一步しっかりと踏み、前に進んでいきたいです。一生懸命頑張りますので、これからもどうぞよろしく願います。

私は4月4日から5日まで、教会学校の子どもたち、先生方と淡路島ワークキャンプに参加させていただきました。トラックにいっぱいの荷物を乗せて淡路島へ。淡路島に着いた時、ふと空を見上げると、雲一つない真っ青な空。澄み切った空気や自然の匂いがとても心地よく、心まで癒してくれました。そして、わかめを取りに海にも出かけました。海の風、匂い、音は、どこか気持ちを落ち着かせるものがあり、開放的な気持ちにもなります。そして今年は、例年になくたくさんわかめが取れたそうです。わかめの他にも、海へ来るときに通るかかった、よもぎの葉も取りました。自然の食材を使っただけの晩御飯の準備。そして食器は竹を切り、削って、自分で作ったお皿とお箸です。それを作っている子どもたちは、みんな嬉しそうな様子。その日取ったわかめやよもぎは、食卓に並ぶことになりました。わかめは、味噌汁に。よもぎは天ぷらに。とてもおいしく、みんなで楽しく頂くことができました。

夜になると、とても冷え込みましたが、空を見上げると、きれいな夜空。たくさん星がキラキラ光り輝いていました。

次の朝もとっても天気がよく、思わず大きく吸い込んでしまうくらい、空気が澄んでいました。いい朝を迎えたおかげで、素敵な一日を過ごすことができました。たくさん自然の恵みに感謝したキャンプになりました。

でも、3月11日に起きた東日本大地震と津波のことを忘れることはできません。とても悲しく、人間がどうにもできない自然の偉大さ、恐ろしさを痛感させられる出来事でした。

4月7日、桜の花が満開に咲き、2011年度の春を、西宮共同幼稚園のみんなと迎えることをできたことを嬉しく思います。園庭には、新しい帽子をかぶった子どもたちの元気な声が響きわたりました。

その日には、みんなで畑にでかけていくことになっていて、今年初めてのお散歩で、子どもたちはわくわくしている様子でした。畑に着くとチューリップが咲き始めていて、子どもたちと共に春の季節の訪れを感じる事ができたのがとても嬉しかったです。次に畑に来る時には、きっと大きく綺麗に咲いているチューリップを子どもたちと楽しむはずです。

4月9日には入園式が行われまし

た。新たな一步を踏み出した小さな子どもたち。みんな西宮共同幼稚園の仲間です。子どもたちの緊張や不安な気持ちをしっかりと受け止め、子どもたちとの関わりを深めていけたらと願っています。

(和田 ひろ美)

## おっさんの通信制大学院学習記

地震から、4週間が過ぎた。夢のような4週間だった。

### 励ましの範囲

16年前の「阪神・淡路」のときに、被災地球団オリックス・ブルーウェーブが袖に縫い込んだスローガンは「がんばろうKOBE」だった。今回は、「がんばろう日本」或いは「がんばろう東日本」という言い方が早くからされていたことを感じる。一地域への励ましではなくて、広い場所へ向けての呼びかけだ。

それほど今度の震災では、被害が広範囲にわたっているのだ。お亡くなりになった人だけ考えても、北は北海道から、南は神奈川県にまで及ぶ。余震、停電、電車のダイヤの乱れ、商品の不足、放射線……と、地震が元になっている不安の種類が多く、長期間であるという点では、関東に住む僕たちも「被災者」なのだ。スポーツや文化的な催しの中止や延期も「被害」と考えるなら、ほとんど日本

政府が今回の震災に、地域の名前を入れずザックリと「東日本大震災」と命名したのも、理解できる気がする。

喉元過ぎても……

3月末頃から、気候が暖かくなってきたのと、発電所の発電能力が回復してきたのが相まって、東京電力管内の計画停電が全く行われていない。それと時を同じくして、各電鉄会社や店舗営業のスケジュールも徐々に元通りになりつつあって、僕たちは少しホッとしている。いわゆる「ヤシマ作戦」が実を結び、「普通の生活」を少しずつ取り戻しつつある。被災生活の「第2段階」に入っているわけだが、一方これから暑い夏に向かって、僕たちはもう一度「本当にふさわしいエネルギーの使い方って何なんや?」と考えるのも、その第2段階で大切なことだ。

昨夜東京から帰ってくるときに使った東急線の電車では、空調機が回っていた。エアコンのスイッチま

で入っていたのか、送風運転だけだったのかはわからない。ただ、どっちだったにしても、もう喉元過ぎて熱さ忘れたのかよ、と思った。

僕はよく、本気半分・冗談半分で、「なんで、クソ暑いときに暑いときなりの格好してない奴に合わせて、エアコンかけんといかんねん？」とぼやいている。去年の夏まではこういう発言はあまり力を持たなかったが、今、まさに必要なのはこの考え方でないのか。

暑ければ1枚脱げばいい、窓は開くのがから開ければいい。窓から雨が入ってきそうな日に初めてエアコンは使うべきだ。

永遠の「ヤシマ」

手を出すだけで水を出してくれる蛇口、本当に買いに来る人がいるかどうか疑わしいのに真夜中まで開いているコンビニエンス・ストア、階段を歩いて上り下りできるのにそれをせずに、わざわざ資源を使って機械で上げ下げしてもらおう人……「便利な生活」は、とても弱っちい土台の上に載っかっていたことを僕たちは知った。牛乳を飲めなくなってまで、卵の不足に悩んでまで、好きなスポーツが観られなくなってまで、僕たちはそういう生活を選び取るのか。そうだ、あの有名な数字の名前のコンビニは、その時刻に開店して、その時刻に閉店するからそう呼ばれ始めたはずで、当初はそれでも「そんなに

早くから・そんなに遅くまで」と重宝がられたのに、今や24時間営業が当たり前だなんて、僕たちの感覚って、どこか鈍くなってしまっている。

水力・火力の発電にも問題点はいくつもあり、それらも冷静に検討することは大切だ。しかし少なくとも、ダムを作った川で何か有害物質が半分に減るのに何百年もかかったとか、火力発電所の事故でそこから何十キロもの範囲の住民が何か月も避難せねばならなかったとかいう話は、僕は聞いたことがない。

例えば、この夏のある1日に僕の勤務先でエアコンを使えば、数年後にプロ野球の開幕が延期されるかも知れない……それは決して突飛な結びつけ方ではない。「ヤシマ」は永久に続けるべき作戦だということに、みんな、気づこう。

地震から、ちょうど4週間が過ぎた。夢のような4週間だった。いや、未だに夢の中にいる、と言った方が相応しいかも知れない。

ヤシマ作戦 = アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」で全日本の電力をかき集めて使徒ラミエルを倒した作戦の名前から、今回の節電運動がこう呼ばれるようになった。

現代版『風が吹けば、桶屋が儲かる』岩倉智久（神奈川県大和市在住）4月7日に記す。

## みかん便り

こんにちは。最近少しずつ暖かくなってきましたね。東北の寒い地域で起こった大震災。極寒の中での避難所生活にならなかったことを考えるとホッとします。自分も阪神大震災の頃は西宮市の甲東園に住んでいたの、1度は震災を経験しています。その時のことと今回のことをいろいろ書きたいとは思っていたのですが、正直、阪神大震災の時の記憶はほとんどありません。自分の家が半壊し、隣りの家が全壊していた風景。夜の道に電信柱が何本も倒れ込んでいる風景。その2つの記憶しかありません。そんな俺が偉そうに今回の震災のことを書くのはなんだか失礼な気がするので偉そうなことは書きません。なので、そんな偉そうなことではなく、今の僕が感じたことを書こうと思います。

幸い愛媛は全く揺れを感じませんでした。あまりテレビも見ないので、地震のニュースを知ったのは翌日の昼のこと。テレビを付けると家がどンドン流されていました。日本ではなく、どこか外国の映像化と思いましたが、日本だったようです。始めはただ単にぼーっと眺めていました。そのうち、1番仲の良い友だちが山形に帰省していることを思い出して電話を試みましたが、出ず。。全然連絡もつかず、2日経ちました。2日

後メールが来て、電池を温存したいから落ち着いたら連絡するとのことでした。

後々電話で聞くと、その友だちの家は無事ですが、山一つ越えれば死体が山のようにあるらしい。親戚の家も1軒流されたが、その家族が入院していたらしく、お見舞い中に地震が起きたので全員無事だったということでした。そいつは笑いながら「健康だったら全員死んでたけどな」と言っていました。恐ろしいです。自分は震災から今まで愛媛でのうのうと過ごしていて、温かい布団で寝ながらテレビを見て『東北の人頑張れ』と思っています。でも、いつも隣りにいた友だちは今、「やっぱり余震あったら怖いわ(笑)」といいながら生活をし、あっちで就活をしています。今のこの差を感じて友だちに悪いと感じる自分を、被災者に同情して上から見てると感じて落ち込んだり、悪いと思ってしまうのは普通のことやと思って自分を慰めたりと色々思っています。

今自分にできること。何なんでしょうね？義援金、物資提供。。とりあえず、それはやりました。あとは何ができるでしょう。色々考えました。今、「がんばろう東北！ 東北大震災支援プロジェクト」というものが今村組によって開かれています。夏、踊り

のチームが集まって東北でライブをしようとしています。うちのチームも参加するか、今悩んでいます。今自分にできることは何なのか。踊ることもそのうちの一つになるのかな？と漠然と思っています。阪神大震災の頃、兵庫にどれだけの人がボランティアに来てくれたのかは覚えていません。ゴミを残して帰るなど賛否両論あったらしいですが、その人達もその人なりに今自分たちにできることを考えて来てくれたんだと思うと、すごいですね。

今あっちに行っても邪魔しそうなので、落ち着いた夏ごろ、何かをしに行こうと思います。

夏までにしっかり考えなければ！！

何ができるかな？とにかく、友だちが無事で良かった。。

(河村 高志)

## 教会学校から

### 《2011年3月の活動報告》

3月6日(日)

津門川 “ ゆっくり ” 散歩・いかなご  
ご飯を食べる

3月13日(日)

高松公園でドッチビー大会

3月20日(日)

教会学校入学式・“ 東北 ・ 関東大地震、  
大津波被災者応援の集まり ”

3月27日(日)

“ 東北 ・ 関東大地震、大津波被災者  
応援の集まり ”

### 《2011年4月の活動予定》

4月3日(日)

東北 ・ 関東大地震、大津波被災地を支援する活動

4月10日(日)

宮城、福島の教会にメッセージカードを送ろう

4月17日(日)

お父さんたちと一緒に遊ぼう。  
高松公園つなひき大会・仙台のおやつを食べる

4月24日(日)

イースターの集まり

2011年4月 あんなこと こんなこと...

大切な贈り物・津門川 1 0 1  
“ 津門川の自然 ”



## つとがわ 編集後記

16年前の兵庫県南部大地震の時、最初に配られてきた西宮市の“公報”は、それまで決まっていた日程でのゴミを出す案内でした。壊れた家もあって、たくさんの人が亡くなってしまいました。壊れなかったとしても、家の中は地震でモノが散乱し、使い物にならないモノもいっぱいありました。“ゴミ”になってしまったのです。上下水道施設は、住宅の周囲、地下で、処理場も壊れていました。ゴミ焼却場も燃料のガスなどの供給が止まっていた。それなのに、ゴミを出すことと、ゴミを集める案内は大地震の前のように出されてしまいました。その結果、街中のゴミステーションは、あらゆるゴミであふれ返ってしまいました。“公報”というものが、平常のマニュアルでしかなされないことと、それと現実のずれを思い知らされながら書き始めたのが“じしんなんかにはまけないぞこうほう”でした。特別のことを書いた訳でも、それで何かが始められた訳ではありません。少しだけ、現実の現場として、ありのままを書き続けたに過ぎません。

16年経って、東北・関東大地震・大津波、そして東京電力の原子力発電所の事故で、16年前くらいの速さで“こうほう”を書き始めることになりました。大地震・大津波について言えば、たくさんの方が亡くなりました。そこに居て生き残った人たちの、茫然と、しかし静かに語る一つ一つの言葉の重さを、ただただ聞くしかないと思っています。しかし、東京電力の原子力発電所の事故は、起こっていることが言葉を失うに十分であり、それに立ち向かうはずのこの余りの貧しさに、その貧しさを見極めることだけしかできないにしても“こうほう”を書き始め、書き続けています。(4月28日現在、27号)

(K)

先日、夜空を見上げていたら一本の白い筋が伸びていました。飛行機雲です。月明かりに照らされたその筋はとても幻想的で美しく、夜の飛行機雲なんて初めてで感激です。誰かに伝えたいなぁ～そう思いつつ、広い空の下できっと誰かも見ているはず。そう願いながら見上げていました。

(I)

自宅から駅へ向かう途中、ハナミズキの花がキレイに咲いている所があります。他にも、カラスノエンドウやホトケノザ、意識して見てみると意

外な所に花が咲いていることに気づいたりもします。

そんなことに気づくこと、小さなことかもしれないけれど、それだけで心が温かくなったりもします。そんな時間を大切に過ごしたいと感じているこの頃です。

(Y)

一度整えられた我が家の小さな庭。その時に昔からあったもので、残したのもあれば、残さなかったものもありました。が！整えてから半年程が経った現在、さっぱりなくなってしまっていた水仙やアジサイがまた芽を出して私たちの目を楽しませてくれています。まだあちこちから芽が出ていて～力強い根がしっかりと生きているんだなぁとその生命力に驚かされています。

(N)

4月も早や終りが見えてきた。春休みのおおがかりの片付けに始まり、新年度を迎え、入園式からずっと走りっぱなしの日々だった。ちょうど我が家も片付けようと目論見をはじめていたのが、屈強の応援隊出動もあり、実行に移した。久しぶりの大掃除、わたしは模様替えをしないとどうも掃除ができない性質らしく、幼稚園の保育室教室に続いて、我が家も教室どころではない「自主教材」を大移動。まあ出てくるわ出てくるわ「こんなものもあった、これは今度使わなくっちゃ！」ということで、埃との戦いも終え今のところ実にすっきり！いつまで続くか！そんなこともあって忙しかったからか、新学期で声の使いすぎか(新人でもあるまいに)で「喉が滅法痛い」の毎日。

27日は新しい年長と篠山・後川へ。行きはバス「授業」に励み、途中強い降りの時の待避中、おやつ争奪のジャンケンを時間つぶしにと思いつき、何度「ぶーぶーぶっさし」と叫んだか。で、「喉が強烈に痛い」、の呻きに「ぼくには何であんなふうに出して遊ぶのかわからない」と。そう、その時はきっちり滅法も強烈も忘れて目の前の子どもにだけ思いが向いてしまっている。

(J)